

ことばの学び

a new way of learning Japanese

別冊 No.12

特集 国語教室で

「防災」を考える

国語教室で「防災」を考える

阪神・淡路大震災から十九年、新潟県中越大地震から九年が過ぎ、東日本大震災から三年が過ぎようとしています。地震多発地帯に位置するうえに、面積の七割以上を山地が占め、河川の氾濫や土砂崩れが起こりやすい条件にある日本列島、そこに暮らす私たちにとって、「自然災害にどう向き合い、いかに対応するか」は、国家レベルで取り組む重要課題です。

同時に、市民レベルにおいても、繰り返されてきた尊い命と生活の犠牲に学び、住民一人一人が意識を高めて防災・減災に当たる必要があるとの認識が広まり始めています。各種のボランティア活動や、行政と市民が一体となって取り組む地域の防災力向上プログラムなどはそのことを示しています。

こうしたソフト面を重視した、住民主体の取り組みにおけるキーワードは、状況を適切に「判断する力」と、「協働・ネットワーク」、すなわち「学び合いとコミュニケーション」の力です。ことばの学びには、思考力、判断力、想像力、コミュニケーション力の育成と向上という目標があります。それは、他者と状況に向き合い、ともに生きる力を育むことであり、防災・減災活動を支える力となるものと考えられます。

「国語教育の中で防災教育は可能なのか」「国語の授業で防災を扱うべきなのか」——こうした議論はまさに、緒についたところでは、本号では、防災教育と国語科教育とをつなぐ試みの一つとして、防災を考える学習材をご提案いたします。

ことばの学びが、今と未来を生きる子どもたちとその社会を守る力の礎となることを願っております。

目次

特集

国語教室で

「防災」を考える

国語

■学習材1

状況を適切に判断し、行動に移す
推論↓交流↓話し合い↓意見文

……2

■学習材2

情報を分析し、課題を発見する
グラフの読み取り↓文章化↓話し合い

……6

書写

■楷書と行書の使い分けを指導する

……10

平成25年度版中学校国語教科書

『中学生の国語』訂正のお知らせ

……11



状況を適切に判断し、行動に移す

推論→交流→話し合い→意見文

《配当時間》2～3時間

《学習目標》

- 自分の立場及び伝えたい事実や事柄を明確にして、文章の構成を工夫すること。(1書)
- 相手の立場や考えを尊重し、目的に沿って話し合い、互いの発言を検討して自分の考えを広げること。(1話とこと・聞くこと)第二学年オ)

1 学習材について

「あなたが避難所で一歳の弟のミルクを作るために水の配給に並んでいると、ちょうど自分のところで配給が終わりました。後ろには薬を飲むために水を待つお年寄りたちが並んでいます。あなたはその水をどうしますか？」

災害時には、日常生活ではありえないような厳しい状況のもとで、適切な判断を行い、すばやく行動に移すことが求められる場面が生じます。阪神・淡路大震災では、葛藤(ジレンマ)の中で究極の選択や判断を迫られるケースが数多く生じていたことが、京都大学の矢守克也教授らの膨大なインタビューによって明らかにされています。

その調査・研究をもとに生まれたのが「クロスロード」と呼ばれる防災シミュレーションゲームです。そこで取り上げられる究極の判断と、その状況設定は、当事者の実体験から生まれたものだけに説得力があります。

「クロスロード」ゲームは、行政における防

災担当者の研修や小学校、中学校、高等学校の防災教育の一貫として各地で実践されています。ここに紹介する学習材(課題文及び課題)は、この「クロスロード」のコンテンツなどを参考にしながら、国語科の学習活動としてアレンジしたものです。

2 学習のポイント

課題1～5は、災害時を想定した、防災教育には欠かせないシミュレーション(イメージ・トレーニング)となっています。

課題1では、状況に対処するために、いかに自分で思考し判断し表現(行動)するかを疑似体験します。

この課題は、他者の思考を「推論(解釈)」する活動を組み入れてデザインされています。他の人のある行動に対して、その人の立場に自分の身を置いて、「なぜ、その人はそうした行動をとるのか」を思考・推論します。

これは、「共感」「同情」をよりどころにした「シンパシー型コミュニケーション」に対

して、「エンパシー型コミュニケーション」と呼ばれるコミュニケーション能力のトレーニングです。

価値観のぶつかり合い、共感や同情によるコンセンサスが得にくいと予想される場面において、合意形成のための「対話」を成立させるうえで、重要な力とされているものです。いったん、他者の立場に身を置いて考える。そのうえで「自分自身だったらどうするだろうか」について話し合い(課題4)、「その状況における理想的な判断と行動とは何か」を文章にまとめしていく(課題5)という流れになっています。

課題2は、文字による対話活動です。災害時の究極的場面では、その場で人々の価値観を共有し、それらに対峙し、あるいは、すり合わせる作業が求められます。ここでは、そうした音声言語による議論や対話の「前段階の(対話)学習」として設定しています。

*参考資料は9ページに記しました。

課題文

【状況設定】

あなたの住む地域に大きな地震が発生しました。倒壊や火災で家を失った住民も多く、避難所兼仮宿泊所となったあなたの中学校の体育館は、避難してきた人々でいっぱいになりました。夜になって、一人のお年寄りがペットの犬を連れて体育館の前まで歩いてきました。しかし、避難している人の中には犬を怖がる子どもや犬が苦手な大人がいて、お年寄りの犬を体育館に入れようとしません。そのお年寄りはずっと一緒に暮らしていた犬とひとときも離れることはできないと訴えます。押し問答が続き、犬が興奮して吠えだしました。お年寄りは疲れと寒さで震えています。

【問い】

もし、あなたが大人で、その避難所の責任者だとしたら、どのような行動をとりますか。

この問いに、中学生のAさん、Bさん、Cさんの三人は次のように答えました。

【Aさん】

そのお年寄りに自分の上着を渡して、「どうしても犬と一緒にでなければならぬなら、他の場所を探したほうがいいですよ」となぐさめるように言ってお外へ連れ出す。

【Bさん】

犬を入れることに反対する人たちに向かって、「責任者の私が決めました」と言ってお年寄りを一緒に体育館に入れる。

【Cさん】

お年寄りとお犬をその場に待たせて、体育館に避難している人を集め、お年寄りと一緒に犬を体育館に入れることについて賛成か反対かの多数決をとり、それに従う。

課題文を読み、課題1～5に取り組みましょう。

課題1

Aさん、Bさん、Cさんは、なぜそのような行動をとると考えたのでしょうか。それぞれの理由を推論して、「交流シート」の中の「私の推論」の欄に書きましょう。

課題2

「課題1」が記入されたシート（「交流シート」）を。ペアやグループで交換したり、回覧したりして、「私の推論」に対する自分の考えや感想を「コメント欄」に書き加えていきましょう。コメントをもらったら、最後は自分のシートを自分のところに戻してもらいます。

課題3

あなたは、Aさん、Bさん、Cさんのうち、誰の行動を支持しますか。あるいは、誰の行動も支持しませんか。その理由を「交流シート」に、一〇〇〇字程度で書きましょう。

課題4

「課題3」について、

- ① Aさん、Bさん、Cさんのうち、あなたのクラスで、支持する人がいちばん多かったのは誰でしょうか。
- ② 「なぜその行動に支持が集まったのか」、また、「実際に自分がそのような状況でそのような立場の人だったら、どうしているか」などについて話し合いました。

課題5

課題1～4の学習をもとに、「災害時における行動」について、四〇〇字程度の文章を書きましょう。

*文章中に次の□の中のことを二つ以上、必ず使うようにしましょう。

判断

優先順位

自分の置かれた状況

交流シート

年 組 番 氏名

■課題1～課題2

Aさん、Bさん、Cさんは、なぜそのような行動をとると考えたのでしょうか。それぞれの理由を推論してみましょう。シートが回ってきたら、その人へのコメント（「私もそう思う」「なるほど!」「私は反対のことを考えました」「そういう推論もできるかも!」など）を書き加えて、次の人に回しましょう。最後は、持ち主に戻します。

★Aさんの行動の理由は……

私の推論 []
 コメント1 []
 コメント2 []

★Bさんの行動の理由は……

私の推論 []
 コメント1 []
 コメント2 []

★Cさんの行動の理由は……

私の推論 []
 コメント1 []
 コメント2 []

■課題3

あなたは、Aさん、Bさん、Cさんのうち、誰の行動を支持しますか。あるいは、誰の行動も支持しませんか。その理由を100字程度で文章にまとめてみましょう。

私は（ ）さんの行動を支持します。／ 私は誰の行動も支持しません。

その理由は、

情報を分析し、課題を発見する

グラフの読み取り→文章化→話し合い

《配当時間》1〜2時間 *話し合い活動は別途

《学習目標》

- 事実や事柄、意見や心情が相手に効果的に伝わるように、説明や具体例を加えたり、描写を工夫したりして書くこと。(書くこと「第二学年ウ」)
- 相手の立場や考えを尊重し、目的に沿って話し合い、互いの発言を検討して自分の考えを広げること。(「話し合い」第二学年オ)

1 学習材について

ペットと暮らす人たちにとって、災害時にペットのことをどのように考えるかは大きな問題です。また、飼い主と別れてしまった動物たちの対策は、地域の問題としても考えなくてはなりません。当学習材のグラフにもあるように、ほとんどの人がペットと一緒に避難することを希望しているというデータがあります。一方で、東日本大震災等では、体育館などの人とペットの居住場所が区分しにくい避難所において、においや鳴き声などに対する苦情があったり、避難所にペットを入れられないために、自家用車での生活を強いられたりするケースも生じました。

こうした現実を鑑み、二〇一三年、環境省は「災害時におけるペットの救護対策ガイドライン」を公表しました。ガイドラインでは、災害発生時には原則としてペットを同行避難させることとし、各自自治体や関係団体に対し、避難所や仮設住宅の受け入れ態勢を整えることや住民への周知を図ることなどの対応を求

めています。

私たちは、災害時におけるさまざまな状況を想定して、平常時よりそれらの対策を考えて、準備・対処しておく必要があります。当学習材では、そうした課題認識を高めるという意味合いも含めて、前学習材に引き続き、ペットとの同行避難にかかわる課題を取り上げています。

2 学習のポイント

課題1は、PIISA型読解力という「非連続型テキスト」の読解です。二つのグラフを関連づけて、「グラフに表現されている情報を正確に取り出すこと。【情報の取り出し】」、「その情報がどのような意味をもつかを理解したり、推論したりすること。【解釈】」、「情報を自分の知識や経験と結びつけて考え、課題を取り出すこと。【熟考・評価】」が学習内容となります。

アウトプットは、グラフをもとに考えたことを文章にまとめる活動ですが、これは自分

の思考の「振り返り(リフレクション)」を兼ねています。

課題2は、文章化から話し合いにつながる学習で、防災教育のうえからも有意義な活動と思われれます。ここでは、言語活動を「パネルディスカッション」「デイベート」「ワールド・カフェ」のバリエーションから選択するようにしています。

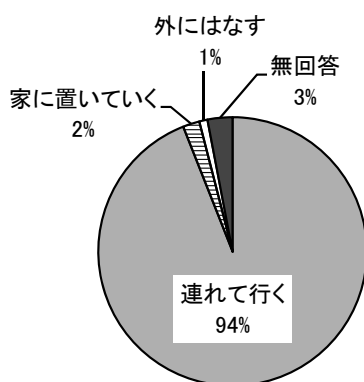
「デイベート」の場合は、その最終目標が、いろいろな立場から問題点を洗い出し、人と動物との共生を考えた防災対策について考えを深めることにあることを押さえて行います。「ワールド・カフェ」は、カフェ(喫茶室)にいるようなリラックスした雰囲気、テーブル間を移動しながらメンバーをシャッフルしつつ行う話し合いです。一九九〇年代にアメリカで開発・提唱されて以来、相互理解を深め、集合知を生み出すファシリテーションプロセスとして、町づくりの市民活動やビジネスの現場など各方面で世界的な広まりを見せています。

課題 1

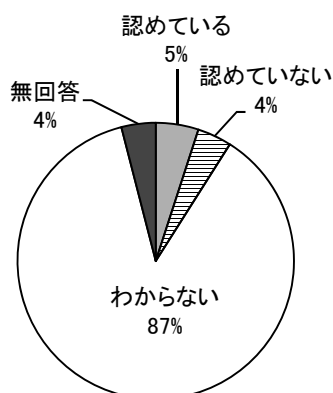
災害時にペットと避難することに関して、以下の二つのグラフから導き出される「問題点」とその「解決策」を、300字程度で文章にまとめましょう。そのとき、次の三つのことばを必ず一度は使用することとします。ただし、使う順序は問いません。

トラブル
対策
したがって

A 災害発生時、避難所に避難する際にペットをどうしますか？



B その避難所はペットの受け入れを認めていますか？



課題 2

「課題 1」で書いた文章をもとにしながら、次にあげた活動から一つ選んで話し合い、「動物との共生と防災」について、考えを深めていきましょう。

●パネルディスカッション

「ペットが避難所で飼い主と一緒に過ごすためには何が必要か」をめぐって話し合う。

パネリストの例：「ペットを飼っている人」「動物が苦手な人」「獣医」「市役所の防災担当者」など

●ディベート

「ペットを飼っている人の立場」と「動物が苦手・嫌いな人の立場」とに分かれて討論する。

論題例：「避難所はペットの受け入れを認めるべきである」など

●ワールド・カフェ

「ペットとともに自然災害を乗り切る」というテーマでいろいろな角度から話し合い、アイデアを出し合う。

■解答例

例1

Aのグラフによると、ペットを連れて避難するという人が大部分であるのに対して、Bのグラフからは、地域の避難所でペットの受け入れが認められているかどうか分からないと答えた人が大部分を占めていることがわかる。したがって、災害が起こったときには、避難先がペットを受け入れるかどうかかわからない状態でほとんどの人がペットと一緒に避難することになる。これではペットの受け入れが認められていない避難所でトラブルが生じる危険性がある。それを避けるためには、ペットと避難することを希望する人は、今のうちから地域の避難所がペット受け入れ可能かどうかを調べておくという対策が必要だ。

(279字)

例2

AとBのグラフによると、災害時には、ペットを飼っているほとんどの人が、避難先がペットの受け入れを認めているかどうかかわからない状態でペットと一緒に避難することになる。そうなると、受け入れを認めていない避難所ではトラブルが起こる可能性がある。したがって、トラブルを少なくするためには次のような対策が必要になる。一つめは、避

難先がペットの受け入れを認めているかどうかを調べておくこと。二つめに、ペットを受け入れる避難所を増やすこと。二つめのことを実現するためには、避難所でペットを飼う人とペットが苦手な人との居場所を分ける工夫をすることや、ペットを飼っている人がペットが避難所でほえたりしないようにしつけておくことなどが必要と思われる。(356字)

例3

Aのグラフによると、ペットを連れて避難するという人が九四パーセントである。Bのグラフからは、ペットの受け入れを認めている避難所は五パーセントで、受け入れを認めていない避難所が四パーセント、どちらかわからないと答えた人が八七パーセントを占めていることがわかる。認めている避難所と認めていない避難所との比率は五対四である。したがって、どちらかわからない八七パーセントの避難所の九分の四にあたる約三八・七パーセントは、受け入れを認めていないという推測ができる。災害が起こったときに、どちらかわからない避難所にペットと一緒に避難した人の約四〇パーセントの人は、ペットの受け入れを拒否されてトラブルが起こる可能性が予想されるので、対策を生じる必要がある。(329字)

■評価の観点

*観点の例

- 1 制限字数で書かれているか。
制限字数がある作文では、プラスマイナス一〇%の字数でまとめることを目標とし、「三〇〇字以内で書きなさい」という場合は二七〇～三〇〇字で、「三〇〇字程度で書きなさい」という場合は二七〇～三三〇字を目安にすることを、あらかじめ提示しておきます。
- 2 「トラブル」「対策」「したがって」という規定のことばを使用しているか。
- 3 「問題点」の取り出しと「解決策」の提示という条件を具体的に満たしているか。
- 4 二つのグラフを関連づけて、正しく読解しているか。
- 5 筋道が通っているか。
 - ・グラフとグラフから導き出された問題点や、その問題点と解決策とがみあっているか。
 - ・「したがって」という接続詞の使われ方が正しいかどうか。
- 6 用字用語が正しく使われているか。
- 7 誤字脱字がないか。

*評価の例

【例1・例2】

・字数他、すべての条件を満たしています。

・特に例2は、対策が複数の角度から提示されておられ、その表現もナンバリングを用いてわかりやすく述べられている点を評価します。

・例1と例2では「したがって」の使用位置が異なります。このような例を生徒間で相互比較して、評価活動を論理展開の学習に結びつけることも大切です。

【例3】

・課題文で要求されていることが満たされていません。「対策」ということばは使用されていますが、解決策が提示されていないので、「対策が必要だ」ではなく、「〜という対策が必要だ」「以下の様な対策が必要だ。それは〜」という具体例を書く指導が求められます。

・「対策を生じる」という用語の使い方が正しくありません。使用規定語彙の「トラブル」「対策」については、その使い方を生徒間で比較することによって、語彙の学習と結びつけることができます。例「トラブルが生じる」「トラブルが起こる」「トラブルに見舞われる」「対策をとる」「対策を立てる」「対策を講じる」「対策を練る」「対策を生じる×」など。

・グラフBの読解において推論を展開して問題点を導いている点は評価したいところです。防災教育では「思いやり」という情緒面とともに、問題を発見し、解決するための科学的思考が重要となります。

「国語教室で『防災』を考える」参考資料

■学習材1

1 『対話流 未来を生み出すコミュニケーション』清宮普美代／北川達夫 三省堂 2009
* 学習材1の「学習のポイント」で取り上げた「推論」「エンパシー型コミュニケーション」について、PISA型読解力に関連づけて説明・解説されています。

2 『防災ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション クロスロードへの招待』矢守克也／吉川肇子／網代剛 ナカニシヤ出版 2005

3 『クロスロード・ネクスト 続・ゲームで学ぶリスク・コミュニケーション』吉川肇子／矢守克也／杉浦淳吉 ナカニシヤ出版 2009

4 クロスロード〈市民編〉 製作・著作：チームクロスロード（網代剛／吉川肇子／矢守克也）
5 クロスロード宮城県登米市児童・生徒編48（2013.12.23 防災教育授業等研修会作成）

* 4は、カード式の防災ゲームです。2・3の図書は、ゲームの成立やそのコンセプトが詳しく解説されています。「災害時のシミュレーションをゲーム化することの是非」については意見が分かれています。ゲーム化の意味についても言及されています。クロスロードゲームは各地で実施され、ニーズや実態に合わせてアレンジもなされています。5は小中学校の防災教育用に作成された一例で、本学習材もそのコンテンツをベースにアレンジさせていただきます。

■学習材2

6 「災害時におけるベットの救護対策ガイドライン」環境省 2013

7 「防災意識アンケート調査集計報告」（NPO 法人アナリス Animal Navigation In Case of Emergency <http://www.animal-navi.com/> 2013/12/4 閲覧）

* 「ワークシート1」のグラフは、こちらのデータを使用させていただきました。データのもととなった調査は二〇〇三年実施のものですが、その後も各地で調査が継続されており、ウェブサイトには、人と動物がともに災害を乗り越えるための方法や課題にかかわる情報が掲載されています。

8 『ワールド・カフェ／カフェの会話が未来を創る』A・ブラウン／D・アイザックス／ワールド・カフェ・コミュニティ（香取一昭／川口大輔訳）ヒューマンバリュー 2007

書写

楷書と行書の使い分けを指導する



松本仁志(まつもと ひとし)
広島大学大学院教育学研究科准教授。書写のカリキュラム開発に専心。小学校学習指導要領で文字と書写に関する事項の解説執筆を担当。著書に「筆順のはなし」(中公新書ブックス)、「書くこと」の学びを支える国語科書写の展開(三省堂)など。

中学校で学習する書体

漢字には、篆書・隸書・楷書・行書・草書の五書体がありますが、中学校で学習するのは、日常的な書体である楷書と行書です。それぞれの書き方に加えて、目的や必要に応じて楷書又は行書を選んで書くことも学習します。楷書又は行書を選んで書くとは、どういうことでしょうか。どのように指導すればよいのでしょうか。

楷書と行書の違い

行書の良さは「速く書いて読みやすい」とことです。中学生になると、板書をノートに写したり自分の考えを文章にまとめたりする機会が増えます。そのようなより速く書く必要がある場面で、行書が使えると便利です。

一方、楷書には、「誰が読んでも読み間違えることがない」という良さがあります。

こうした楷書と行書それぞれの良さを捉えて、場面に応じて適切に使い分けられるように指導していきましょう。

使い分けの条件

必ず楷書で書かなければならない場面はありますが、願書などのフォーマルな文書を書くときなどに限られています。また、必ず行書でなければならぬ場面はありません。つまり、ほとんどの場合の書体選択は「どちらがよりふさわしいか」といった主観的な判断なのです。主観的といっても、なんとなく決めてよいのなら指導は必要ありません。ポイントは「読み手(関係性)」と「書く場面(目的・状況)」です。

場面を示した指導

たとえば、本誌の特集「防災」にちなんで、「災害にあつてしまったとき」という場面で提示して考えさせることもできます。

災害時は、電話やインターネットが機能しなくなり、手書き文字で連絡を取り合う場面が多くなります。メモを取る、伝言を残すなど、急いで書かなければならないなら、行書を選択するのがふさわしいと考えられます。

家族など、自分の手書き文字を見慣れている

身近な人へ伝言を書き残す場合は行書で問題ないでしょう。しかし、一人でも多くの人に読んでもらいたいような内容の場合は、時間が許す限り楷書で書くのがふさわしいでしょう。住所などを書く場合も、読み間違いを避けたいならば、楷書がふさわしいといえます。このように、具体的な場面が示されると、どちらの書体がふさわしいか、生徒も考えやすいでしょう。

日常に書写の学習を生かす

書体を使い分ける力とは、筆記具を選択する力などと同じ「書写技能の運用能力」のごく一部です。しかし、学習指導要領で書体の選択を取り出して指導事項としているのは、楷書と行書を、特に行書という日常書体を、生活の中で積極的に使って欲しいという願いがあるからでしょう。楷書・行書それぞれの良さを理解して活用できるようにすることを目指して、指導を工夫したいものです。

平成25年度版 中学校国語教科書『中学生の国語』
訂正のお知らせ

平成25年度版『中学生の国語』に訂正の箇所がございます。
ご指導の際には、ご留意くださいますようお願い申し上げます。
なお、平成26年度は、訂正した教科書を供給いたします。

学年	巻	頁	行	原文	訂正文	備考
2	別	36	著者紹介 1行	一九二〇年―。	一九二〇年―二〇一三年。	客観的事情の 変更。
2	別	29	著者紹介 1行	原田宗典	(削除)	
2	別	26	上段・中 段右	『海の短篇集』	(削除)	
2	別	22	下・左	海の短篇集	(削除)	
2	本	24	7	〔推定〕	〔推量〕	3年別冊122 ページも同様。
2	本	23	20	推定・	推量・	3年別冊121 ページも同様。
2	本	22	16	られる。	られる。	3年別冊120 ページも同様。
2	本	22	14	られる。	られる。	3年別冊120 ページも同様。
2	本	175	9	土肥 ^ど	土肥 ^ど	3年別冊120
1	別	87	下開み3	学校基本調査 一年次調査	学校基本調査 年次統計	
1	別	87	上開み10	学校基本調査 一年次調査	学校基本調査 年次統計	

学年	巻	頁	行	原文	訂正文	備考
3	本	301	未然形 まじ	まじかる	まじから	
3	本	300	文語助動 詞活用表 已然形	しかれ	しけれ	
3	本	300	文語形容 詞活用表 ク活用 已然形	かれ	けれ	
3	本	271	7段1行	⑤暴	⑤暴	
3	本	257	4段4行	4画	5画	
3	本	255	2段22行	15画	14画	
3	本	255	1段14行	13画	12画	
3	本	250	5段1行	13画	12画	
3	本	142	脚注16	庵原 ^{いげち} 郡	静岡市の	
2	別	149	左7行	海の短篇集	(削除)	

※本々本冊／別々別冊『学びを広げる』

国語授業における

「対話」学習の開発

花田修一 [編著]

A5判 / 160ページ / 本体 1,900円 + 税

なぜ、みんなで学ぶのか

「対話」とは、他者との違いをバネに、コミュニケーション力を鍛え、思考力を深める営み。自分とは違う意見に耳を澄まし、静かに自分の考えを対置する。その繰り返しのより、一人ではたどり着けない場所に向かって、人は新たな一歩を踏み出すことが可能になる。本書は、その可能性の光の下で編まれた、「対話」学習に関する理論と実践例の提案書である。

●「まえがき」より抜粋（本書の構成）

第1部は、「対話」学習に関するそれぞれの専門的立場からの理論的提言が中心である。

第2部は、「対話」学習に関する実践的提案が中心となっている。それも「ペアトーク」「討論」などの「話すこと・聞くこと」の領域だけではなく、「説明文」「意見文」などの「書く」領域で「対話」を取り入れたり、「説明」「物語」「随筆」などの「読むこと」の領域に「対話」を取り入れたりした。また、「伝統的な言語文化」や「国語の特質」などに関する学習にも「対話」を取り入れて、いずれも学年発達にふさわしい領域や話題や学習教材などを工夫して指導したものである。

第3部は、「対話」に関する先達の主張や文献などを簡潔に紹介し、その考察を行った内容が中心となっている。



三省堂 国語教育

ことばの学び

a new way of learning Japanese

別冊 No.12

特集 国語教室で「防災」を考える

2014年2月1日発行

●編集・発行人 北口克彦

●発行所 株式会社 三省堂

〒101-8371 東京都千代田区三崎町 2-22-14

TEL 03 (3230) 9446 [編集] 9551 [営業]

URL <http://www.sanseido-publ.co.jp/>